

“MY TOWN” うおっちゃん

歩 & 目 デス 足 ラテス

Vol.93

まちのデザイン、その後
(八幡浜市)

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

【歩キ目デスは見た!】

社会デビューのつ
もりで書いた「まち
のデザイン」の刊行
から、気が付けば幾



まちのデザイン

星霜、既に四半世紀近くの時が流れた。筆者が生まれた町八幡浜に題材を取り、地域が育んだ歴史を通しての目線で、当時確かに存在していたそれらデザインを追った一冊。当然の帰結として、これまでの間に今は無き失われたデザインも数知れず。経済活動のみならずの社会変化の中で、その変貌は著しい。この本で取り上げた52件のそれらのうち、既に約3分の1近くが消滅している。いくつかを振り返りたい。

【森菊商店のフグの看板】

この愛すべき看板が建物ごとこの町から消えたのが平成30年。かつては旧港（現在の市役所が建つ場所）に面して、森菊商店という妻入り漆喰造り二階建ての商家建築があり、看板はその正面真ん中で見事な異彩を放っていた。この何とも言えないポップアートな手作り看板は、全国の名だたる看板が載る「看板物語」（平林規好著・1989刊）という本にも登場するほどだった。文字看板の上



森菊商店のフグの看板

に大きなフグが悠然と泳いでいる。よく見れば、フグの胸びれは立体だし風雨にさらされ続けたせい、そのブルーの色合いも絶妙なトーンを醸している。よく観察して作られたものか姿形はリアルで、大きさは両手を広げたくらい、幅一間（約2m弱）ほどもあるのか。製作者は「伊予フグ」育ての親とも呼ばれた森田菊太郎。なので看板には「元祖ふぐ料理」と左に、右には「手造ふぐちようちん」とも朱書されている。パソコンのレタリング文字などと違い、店名、電話番号に至るまで全て手描き、味がある。そう、ここはフグ料理屋、味がなければいけない。きつと手先の器用な料理人だけに違いなく、そんな市井のマエストロが気合で作った大きなフグ看板。直ぐ目の前の海にチャボンと跳び出すのではないかと思えそうな、そんな港町の心意気が伝わる意気のいい時代が、確かにこの町にあったのだ。

【坂本歯科醫院の看板】

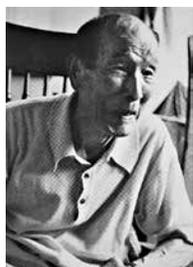
歯科としての役割を終え空き家となつて久しいが、嬉しい事にまだこちらの看板は健在である。ただ、古民家再生の道

を採り活用を考えないと、これとて存続は難しい。こうして町は知らず知らずのうちに、何の変哲も無い街区と化してゆく。

さて、このレトロ看板の作者であるが、こちらは本格的な、でも地域では無名なマエストロの作になる。その名は坂本榮太郎（1913-2007）さん、珠玉のブロンズ製具象作品を作られていた彫塑家。氏の姉シノブさんが戦後間もなく八幡浜で歯科を開業された



坂本歯科醫院の看板、陽刻と陰刻



遺作展の際パンフに使用された写真

際、宇和檜の一枚板で製作されたのがこの看板である。絶妙な間隔で篆書を陽刻した表側と、裏側は大洲大禪寺の河野玄要和尚による草書体を陰刻にされた。なので板の厚みは二寸もある。篆書は、古代中国の象形文字がルーツだから特に「歯並び」のイイ仕立てとなっている気もする。お向かいにある本町教会と和洋で対峙して、町なかにこれほどじっくりと溶け込んだ看板を私は他に知らない。作者の人となりも気になるところ。

【坂本榮太郎氏アトリエ】

氏のアトリエが八幡浜の広瀬にあり、間もなく見納めとなる。その晩年になって抑えがたき創作意欲にかけられた榮太郎先生は、大洲市役所を退職された後、昭和49年61歳の時ここにアトリエを建て、大洲渡場の住居から熱心に通われた。若き頃、東京美術学校彫塑家に入学され、当時の教授陣は建島大夢、朝倉文夫、北村西望ら錚々たる人たちであったという。



榮太郎先生のアトリエ

地域で無名と前述したが、晩年の創作活動に加え、作品発表は東京のみで数回グループ展、個展をされただけだったので無理もない。没後、一度きり松山で遺作展が開催されただけであるため、八幡浜でも知る人は少ない。ただ、橙（だいだい）、ムクロジなど身近な果実や種子を題材に、その具象の神髄に迫ろうとした作品の数々は、一度目にしたらきつと魅了される。少なくとも筆者はそうだった。何故その形がそこそこうしてあるのか、その自然の摂理、神業とも思えるありのままの形が見せる奥深さに、慈愛ある先生の語り口を聴くにつけ、私も惹き込まれた。ご自身が「ルソーの庭」だと丹精し嬉しそうに自慢されていた風景も今は無いが、その作品群は残されている。いつの日か、多くの方々それぞれ至高の具象の美を堪能してほしいものである。



本家の飛び石と門まわりの配石（氏が脇川の河原石でデザイン）